

F 1 母親に対する障害理解教育の実践
筑波大心障 徳田克己

目的 障害児・者に対する正しい認識の形成や態度の改善のために、公民館活動やPTA活動を通して、母親に対する働きかけを続けている。本報告では、これまでの実践をまとめ、いくつかの視点から、これらの活動の教育効果を評価した結果を述べる。

方法 公民館での家庭教育学級、婦人学級、青寿学級およびPTA活動における学習会の2～10時間を筆者が担当し、「障害理解講座」を開催した。点字の読み、手話の体験、盲人の手引き方法、障害児・者を取り扱った映画、ボランティアの心構え、盲人の講演、聾者の講演、特殊学校の見学などが講座内容であった。これらの活動の効果は「多元的態度尺度」「ボガードスの社会的距離尺度」「SD尺度」などによって評価された。またこれらの活動が母親によって家族にどのように伝えられたかを調査した。

結果①点字の読みの学習や盲人手引きのシミュレーション体験は、視覚障害者に対する理解を深めるには効果的である。②障害者による講演は直接接触型のコミュニケーションであり、いくつかの態度次元では顕著な改善を示すが、情動的反応が強く生じられるため「特殊能力」などの次元では逆にネガティブな態度変容を引き起こす可能性がある。③映像を用いる方法では、その内容によって大きく効果が左右される。④特殊学校の見学は全体的に認識を深めるためには有効であるが、変容効果はそれほど大きくはなく、「統合教育」の次元では大きくネガティブな方向に態度が変わる。講義併用の必要性がある。⑤情動的反応が強く生じする方法ほど、家族に対して多くのことが伝えられ、また態度変容効果が長期間にわたって持続する傾向がある。